

近世本  
國道政  
運人

等  
土木工學  
十九卷

江蘇

圖書室

SHC

T-19

3268

昭和 40年 7月 15日

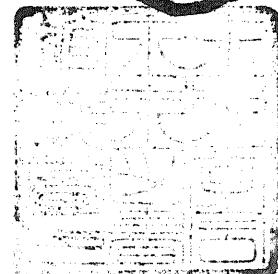
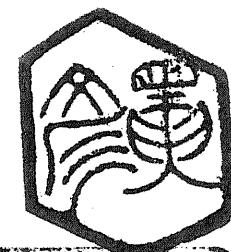
寄贈者 久木寅彦

名著100選圖書

登録	昭和 40年 7月 19日
番号	第 3268 号
社団 法人	土木学会
附属	土木図書館

# 土木瑣談

牧彥七著



東京

常磐書房版

## 目 次

緒 言 .....	1
第一章 技術家としての吾初陣——始めを善くするは成功の半 .....	
1. 小僧の和尚勤 .....	3
2. 渡 臺 .....	4
3. 最初の職務 .....	5
4. 大稻埕護岸工事の概説 .....	6
5. 最初にして最大の悩み .....	6
6. 入子管使用上の注意 .....	7
7. 危ない際仕事 .....	8
8. 会計實地検査の苛察 .....	8
9. 手續書の追咎 .....	9
10. 児玉總督との初対面と其の印象 .....	21
11. 自力主義の芽生 .....	22
12. 不當な更訂設計 .....	22
13. 先輩との論争 .....	23
14. 命懸けの工事監督 .....	24
15. 献身的努力の賜物 .....	25
16. 歓喜裡の竣工 .....	26
17. 小心大膽身を以て事に當れ .....	27
第二章 技術とは何ぞや .....	
	29

1. 英國土木學會派の定義	29
2. 同前定義に對する批判	29
3. 經済觀念は人類の本能性である	30
4. 人事を對象とする用語の定義と時代	31
5. ジレット氏の定義とウェーリントン氏の說	33
6. 藝術と技術の異同	35
7. 真の技術家たる困難	36
8. 超技術の問題	37
9. Engineer とは超技術家なり	39
10. 技術家に對する一般認識の不足	40
11. 餘論の一、Engineering に於ける天才(Genius)の價値	42
12. 餘論の二、Engineering に於ける經驗(Experience)の價値	44

### 第三章 讀書上の注意

1. 讀書の必要	49
2. 讀書法	51
3. 書籍の誤脱	52
4. 誤謬の實例 其の一	55
5. 誤謬の實例 其の二	57

### 第四章 油練道路に關する排水問題

1. 總 說	59
2. 油練道路の沿革並に其の築造法	60
3. 道路と排水	62
4. ニューエキシコ州の地理的説明大要	64

5. 水は如何にして油練道路に作用するか	65
6. 豫防方法	65
7. 最近我國の國道改良の不用意	67
8. 倫敦郊外大西道路の彈性設計	69
9. 適當な側溝	70
10. 溝橋及地下排水管	71
11. 路面水の除去	72

### 第五章 道路の安全と利便に關する米國の時 事問題

1. 今昔の交通感	73
2. 於り安全な道路と高速化に對する止め度なき要望	75
3. 道路の保安設備	78
4. 道路の總幅員	79
5. 屈曲と坂路	81
6. 車道の路面	81
7. 低速交通を外側車線に誘引すること	82
8. 二元式道路	83
9. 自動車運轉の種々相と其の對策	85
10. 外側車線の完全使用	87
11. 充分なる道敷の獲得	88
12. 交通分流壇	89
13. 旋廻の整理統制	89
14. 運動の分離	90
15. 乗客昇降臺	91



る環境の裡に余の攢書癖は——寧ろ麻中の蓬の様に自ら抜けずして——自ら表はれた。物換り星移つて多士濟々の現代に、“二十五の菩薩も夫々の役々”に納つて居らるる人々には、思ひも及ばぬことであらうが、當年生立の技師連中に、俗臭な八百屋式の多いのは、ザット以上のこと由に基づくのである。

本書は以上陳べ來りたる環境の裡に、南船北馬・東奔西走の現役中、余の體験や感懷に筆を起こし、近著の外國雑誌等の記事を之に加味鹽梅したものである。當初何か獨得の題目をがなと思はぬでもなかつたが、余が監修の責を有する本『高等土木工學』が、既に錚々たる我邦第一流の權威者の手に由り、各問題の亘細に涉つて、檢覈祖述せられたる現實の前には、余の獨眼に這入る遺珠もなく、又烏滸がましくも余が今更足を踏み入るる餘地もないで、當年の所謂“八百屋式技師”的看板に併りのない所を見せなければならぬ、余としては寧ろ餘儀なき羽目に落ちたのである。併しそれ却つて本全集監修の重責に乏を承けた余が、讀者諸彦の坐右に完好無比な『高等土木工學』を提供し得たる證左であると自畫自贊して、無上の誇を感じると同時に、絶大の喜を禁じ得ぬ次第である。

前にも云つた様に、本書は諺に“老いたる馬は道を忘れず”とある、余が半生の世路を彩つた、其の體験と感懷とを骨にして居り、中には他の専門に手を觸れた點もあるので、多少の異論や批評は固より覺悟の前である、唯之に由つて世の識者の教を受ければ足る。

又諺に“教學相半ばす”とあるが、凝思多年の所懐も愈々筆を執るとなれば、困學の苦みも並大抵でなく、自ら彊めた御蔭で收穫も鮮くなかつた。併し古人が“書を校正するは塵を掃ふが如しだ、一面から掃へば則ち一面に生じて来る、三・四校毎に猶誤脱がある”と云つて、書物は幾回校合するも尚且誤脱あるを指摘して居る通り、本書にも充分な検讎を遂げた積ではあるが、萬に誤脱なきを保し難い、之に對しても腹藏なき高教を垂れられんことを切に希ふ次第である。